論壇の「起源」と「反起源」

── 1930 年代「雑誌短評欄」の位置価──

毛里　裕一

「論壇」なるものは、実体的に存在するものとしてよりは、後づけ的に言及＝関連づけがなされていくことによって更新されていく社会的カテゴリーとしてとらえるべきではないか。本稿は、1930 年代の新聞紙上で展開していった似て非なる 2 つの言及の様式──論壇時評と雑誌短評──に着目することで、その言及＝関連づけの歴史的・具体的様態を検討した。まず、「論壇」に関する関連性（レリバンシー）の設定が不可能であるという了解が成立しているからこそ、かえって暫定的な関連性（レリバンシー）の設定が励起されていることを確認した。その上で、当時、論壇時評と同時期に生まれた雑誌短評が「文壇」と「 論壇 」とを同一平面に位置づける媒介の役割を果たしたこと、また、2 つの様式の下において積み重ねられた言及＝関連づけには、現在とは異質な要素も含んでいたことを示した。

1　問題意識と方法論

1－1　論壇なるものの措定の困難さ／否定のたやすさ

「論壇」なるものはいかなるかたちであるのか。とはいえ、この問い自体が実定性（ポジティヴィティ）を欠いた、ひどく時代遅れなものに響くかもしれない。

「論壇」なる語が言及される際、そこではその指示するところが曖昧であることがしばしば意識されている。「この概念の定義次第」（田中 1999: 184）や「なかなか説明が難しい」（奥 2007: 9）などと。だが、そこからこの語彙としての曖昧さそれ自体が問われることは少ない。さしあたり「知識人の言論の世界」（田中 1999: 184）や「専門家が自己の見解を表明する場」（奥 2007: 10-11）などへと換言された上で、それぞれ知識人論や思想史、メディア論などに引きつけられて記述が進む。そこでは、積極的（ポジティブ）＝実定的（ポジティブ）には語れないことがひどくあっさりと折り込まれた上で、論壇のありようをめぐる問いは迂回されていく。積極的（ポジティブ）＝実定的（ポジティブ）に語れないことについてのこうした黙諾は、「論壇」なるものの歴史を記述する際にも微妙に反映される。それは、「一九七〇年に至るまで」（田中 1999: 193）「一九七〇年に到達したところ」（奥 2007: 225）などともっぱら回顧的な視点から──つまりは現時点での実定性を半ば否認するようにして──語られる。積極的（ポジティブ）＝実定的（ポジティブ）に語れないことが語らないことには結びつかない。「曖昧なもの」「昔のこと」として一段ずらされた上で、なおそれは語られるのである。

その意味では、同時代のこととして「論壇」の微妙な境位に触れている大塚英志の次のような記述は稀有な存在であり、また興味深くもある。

> といってもこの「論壇の人」になるのには何か特別な手続きが必要であったり、あるいは何かの組織に加入しなければいけないわけではない。何となく冒頭に挙げたいくつかの雑誌のどれかに物を書いた段階で「論壇デビュー」となり、さらにまた何となく書き続けていれば「論壇の人」になる、といった感じだ。（大塚 2001: 7）

自身「三十歳になるかならないかという時に『論壇デビュー』」（大塚 2001: 7-8）したとする大塚のやや含羞めいた記述もまた、いわゆる「論壇誌」――『文藝春秋』『中央公論』『世界』『正論』『諸君！』『Voice』『論座』といった雑誌――という「メディア」やそこに「何となく書き続けてい」るという「成員資格」に焦点を当てることでひとまず論壇なるものを規定しようとする。だが、少なくとも今日、件の雑誌に「実際に物を書いていること」が、「論壇の人」を認知する局面で指標たりえるかはたちまち怪しくなる。慢性赤字体質で発行部数がたかだか数万部にまで落ち込んだ「論壇誌」や、そこへの「寄稿者」に定位するかたちで「論壇」なるものの存在を云々することに、一体いかなる意味で実定性があるのか、と。実際、大塚自身もすぐに次のように認める。

> いうまでもないことだが「論壇」という具体的な場所が現実の世界のどこかにあるわけではない。それは「論壇」の親類筋（？）に相当する「文壇」も同様である。つまり当たり前だが「論壇」は見えない場所である。（大塚 2001: 8）

「論壇」の存在を否定することは、ある意味とても容易い。「論壇の人」という成員資格も、彼ら彼女らによって著されるテクストの性質も、あるいはそれらを掲載するメディアの種類も、「論壇」の内と外とを峻別する規準としてとらえた瞬間、どこかしら齟齬がみつかる。だが、この積極的な措定の困難さ、その実体レベルでの実定性の否認しやすさこそが、実は「論壇」なるものの社会的カテゴリーとしての実定性を下支えする核となってきた性質ではなかったか。

1－2　言及による関連性（レリバンシー）の設定

こうした実体レベルでの実定性の否認のしやすさそのものを重要な特性として検討するために、本論では、「論壇」なるものをコミュニケーションの接続によってその都度更新されていくものとしてとらえる。その際に注目するのが、個々の接続の場面に見られる「なにが内でなにが外であるか」という区別、関連する（レリバントな）範囲の設定のありようである。具体的には、先在する特定のテクスト群を「論壇」に関連する（レリバントな）ものとして指し示すことになる「言及」を、コミュニケーションが接続する具体的な場面と想定する。そこでは、「言及する」（あるいはしない）ことが、いかなるかたちで自らの文脈として特定のテクスト群を「論壇に関連づける」（あるいは関連のないものとして扱う）ことになるかを検討することになる。

このようなテクスト群の捉え方は、近年、佐藤俊樹によって素描されている関係的な行為論・コミュニケーション（システム）論に想を得ている。

> つねにだれかの言葉の引用であること。引用はその言葉に導かれ、かつその言葉を導く。……「文化」や「社会」が引用の外部に、あるいは引用の以前にあるわけではない。むし

ろ引用は引用される言葉を導くことで、以前のことばを現在化＝活性化 actualize させる。そして、その引用も言葉であるがゆえに、その後で引用されることで、現在化＝活性化 actualize される。（佐藤 2002: 66）

佐藤のひそみに倣うならば、「論壇」なるものもまた、特定のテクストが言及によって不断に現在化＝活性化されることで措定されていくものとして捉え直すことができるのではないか。そのようにとらえることによってはじめて、知識人論や思想史、メディア論などへと還元するかぎりは取りこぼされる「論壇」なる語彙の特殊近代日本的な文脈に接近できるように思える[1]。

関連する（レリバントな）範囲を規定する積極的（ポジティブ）＝実体的な指標が「論壇」にはないにもかかわらず、あるいはないからこそ、後付け的に様々な位格[2]を「論壇人」として読み込み、また散逸的な種々の「談話（ディスコース）」を「論壇」を構成する「討議（ディスコース）」と解しうる自由度が生ずる。かかる自由度を前提として、「なにが内でなにが外であるか」についての後付け的な言及＝関連づけが多年に渡って積み上がっていくなかで、いわばその「自重」によって「論壇」なる社会的カテゴリーの同一性が更新されていく。「知識人の世界」や「言論・思想の場」などへと短絡させることなく、社会的カテゴリーとして「論壇」そのものをとらえ返したとき、どのような光景が見えてくるか。本稿の問題関心はそこにある。

思えば、「論壇」なる語彙の意想外の長命ぶりも、それを知識人や思想、メディアなどの謂（いい）としてではなく、社会的カテゴリーとしてとらえることによってより理解しやすくなる。「論壇」なる実体がもはやないと言挙げしてみせることは、その言及＝関連づけそれ自体によって社会的カテゴリーを更新することにつながるからである。たとえば、先に引用した大塚のテクスト自体がそうした性質を備えている。まず大塚は、バルトに倣って、既存の「論壇の人」を二種に分類した上でもろともに批判してみせる。すなわち、従来どおり総合雑誌に書き続けている旧来型の「論壇の人」が書くテクストを「一面記事的」として、無反省なまま文脈読み取りの負担を読者に強いているとする一方で、「わかりやすさ」を求めてサブカルチャーの世界に打って出た新しい「論壇の人」のテクストを「三面記事的」としてそれが体系性や整合性を毀損しているとするのである。しかし、その直後に大塚自身のテクストは「三面記事と一面記事を行き来するよう」（大塚 2001: 25）に語るものとして提示される。そして、いわば既存の２種のテクストがはらむ矛盾を調停し止揚するものとして、「論壇」の語が再び召喚される。

同じような構図はインターネットについても見てとれる。それは、登場時にはしばしば「マスメディアからパーソナルメディアへ」という惹句とともに迎えられ、「論壇」に「場」を提供するようなマスメディアの存在を否認するものとして位置づけられてきた。しかし近年では、いつのまにか「ネット論壇」なるこなれぬ語彙も散見されるようになってきている。こうした事態もまた、その社会的カテゴリーとしての特性ゆえの、「論壇」なるものの執拗な回帰と看做すことができよう。

かかるかたちで今日もなお長らえている「論壇」なる「社会的カテゴリー」を文脈づけ、また解釈枠組を提供してもいる歴史偶有的な言及＝関連づけのありようを、過去にさかのぼるかたちで具体的に検討していくのが次節以降の作業である。

2　論壇時評なる言及の様式

「論壇」の関連する(レリバントな)範囲、すなわち「なにが論壇の内でなにが外であるか」をめぐる後付け的な言及＝関連づけを検討する上で興味深いのは、主として新聞紙上に掲載される「論壇時評」欄である。同欄については、従来から「論壇人による論壇人の相互評価の場」「論壇の制度的確立のメルクマール」（田中 1999: 192）として関心が寄せられてきた。ただし、言及＝関連づけの水準に「論壇」の実定性を求める本研究がここで特に注目するのは、その様式性である。

論壇時評においては、大別して共時的言及と通時的言及という２様の様式が成立している。ここで共時的言及とは、「論壇時評」として通常想起される当該月発行のテクストへの言及を指す。同欄は、月刊誌の存在を半ば前提にして、過去１ヵ月のあいだに発行されたテクストに関連性(レリバンシー)を設定しながら言及していくことを基本とする。当然、対象となるテクストが執筆された時点とそれを批評する時点のあいだには実際にはタイムラグがある。にもかかわらず、そこでの事後的な言及＝関連づけが「月評」や「時評」と呼ばれていることからもうかがわれるように、毎月直近の「論壇に関連する(レリバントな)テクスト」が周期的に探索されていくことによって、本来は機械的な区切りにすぎない１ヵ月間が「共時的な地平」の様相を呈することになる。

とはいえ、論壇時評が通時的な言及をまったく行わないわけではない。自己が言及すべき対象の総体である論壇なるものについては、論壇時評はしばしば過去に遡って言及する。そこでは論壇なるものについてその通時的なプロセスが措定されることになるが、実際の論壇時評を検討してみると、通時的な関連性(レリバンシー)の設定にあたってある特定のパターンが間歇的に現れることがみてとれる。具体的には、論壇を「かつてはあったが／今はない」とする言及＝関連づけが繰り返し出現するのである。

以下、実例に則しながら、論壇時評という様式がもつこの２様の構造的特性について通時的言及・共時的言及の順に検討していこう[3]。

２－１　起源への遡行――通時的な言及の様式の特性

前述の大塚（2001）は 90 年代以降の論壇の変質――論壇人のサブカルチャーへの進出の動きとそれによる体系性・整合性の毀損――に照準するものだったが、たとえば次の論壇時評によれば、すでにそれ以前から論壇はその実定性を否定されている。

> 一九六〇年代、一九七〇年代、一九八〇年代にそれぞれ一度ずつ、わたしは新聞の「論壇時評」という仕事にかかわることになった。そしてそのたびに論壇時評という仕事が、確実に困難なものになってきていることを感じる。（見田 1985: 7）

> 先日の論壇時評の集まりで、「論壇の終焉」ということが語られた。『世界』とか『中央公論』の巻頭で学者や評論家が「今こそ国会へ」といった大号令をかけるという六〇年安保までの時代は終わった。時代をひらく思想はむしろ、分散する中小メディアのなかにみられる。「論壇」が生活の思想の頭上に「壇」として存在するという虚構が消滅したことは、七〇年代のたしかな獲得物のひとつだ。（見田 1976: 5）

もちろん、見田の立場は論壇の消失を嘆き悼むそれではない。彼自身は、以前は確固とした

ものとして見えていた論壇なるものの方を「虚構」とし、そこに投影されていた「思想の現在なり、現代社会の核心的な自己表現なりその理論的な解明なりの最前線」（見田 1985: 7）はいまやさまざまな中小メディアの方に体現されていると考える立場に立つからである[4]。

著者の立場を超えて、むしろここで注目されるのは、「論壇」の消滅の確認が都合 3 度にわたって浅く引きのばされている点である。論壇の消滅が 3 回にもわたって確認できるのは、その都度「かつてはあったが／今はないもの」として何らかの「落差」が措定できるからである。だが、ここで関連性（レリバンシー）を設定する上で重要な役割をになっているのは、実は「かつてはあった」という論壇のイメジの方であり、さればこそ現状を「消失」や「拡散」、あるいは中小雑誌による「代替」と解釈できているのではないか。こうした消失がかくも繰り返し表明されるという事実それ自体が、「かつてはあった」と言及することによって関連性（レリバンシー）を設定する言及＝関連づけの様式性の強さをかえって示唆している。

たとえば、70 年代には論壇なる「虚構」は消滅していたとする見田の論壇時評も、その評価は別にして「一九六〇年代の前半ころには、『論壇』という実態がりんかくをもって、たしかに存在するものにように、多くの人びとにはみえていた」（見田 1985: 7）ことは認めている。しかしながら、そこで名指される 60 年代においても、たとえば経済学者である都留重人の時評は、その名も「論壇は実在したか」という雑誌論文を採りあげて次のように述べるのである。

> 「内的生命の思想化」というのは、いかにもわかりにくい言葉だが、そういう意味での「論壇」が大正期には成立の芽生えをみせたのに、それが流産し、戦後の現在、確実に存在しているとはいいがたい、という山田［宗睦：引用者註］の論旨は、全然わからぬでもない。（都留 1962: 9）

あるいは「六〇年安保」以前の 50 年代にも、たとえば吉田精一による時評が、やはり吉野作造の長論文が掲載されていた頃の『中央公論』と比較して、直近の総合雑誌の断片的な編集方針を問題にしている（吉田 1953）。このように論壇時評という言及＝関連づけの様式を追っていくと、「かつてはあった」はずの実定的な論壇は、あたかも「逃げ水」のように歴史を遡及していくことになる。

実は、こうした「かつてはあったが／いまはない」というかたちでの論壇への言及は戦後に限ったものではなく、論壇時評という様式が成立した戦前からしばしば見られたものであった。たとえば 35 年に鈴木義男の時評のなかで批判されたのは、かつて「指導的献策」を多数掲載していた総合雑誌が、随筆や雑文・回想談などで紙幅を埋め「高級娯楽雑誌化」している傾向であった（鈴木 1935）。またその前年には、室伏高信の時評のなかで、総合雑誌への寄稿者層の変化――職業的評論家層の退出と政治家・軍人・実業家などの「素人」への寄稿依頼――が「評論壇」の堕落ととらえられている（室伏 1934）。あるいは 32 年にも、すでに高橋亀吉の時評のなかで、当時進行していた総合雑誌の編集プロセスの変化――寄稿者から編集者へのテーマ設定の主導権の移動、執筆期間の短縮化など――を指摘した上で、それが論壇にもたらす弊害――問題の後追い傾向や内容の低下――が指摘されている（高橋 1932）。

論壇時評なる言及の様式のなかで、論壇なるものに対しては、さまざまな意義や特性が読み

こまれ、それを前提にして言及＝関連づけが行われるが、時間軸を導入した上での通時的言及においては、その意義なり特性なりは「いまはもうないもの」としてしばしば過去へと投影される。だが、こうした過去への投影自体が、ここまで確認してきたように、実は論壇時評なる様式が生成されるころから繰り返し励起されてきたものであった。論壇時評の起源にまで遡ってみても、真の「論壇」なるものはすでに「もうない」。それは、どんなに近づいても辿り着くことができない「逃げ水」の様相を呈するのである。

２－２　虚焦点としての総合雑誌――共時的な言及の様式の特性

さて、「論壇」なるものの消滅を数次に渡り宣した見田の論壇時評だが、共時的な言及、すなわち過去１ヵ月の間に登場した多様なテクストへの言及に関してもある特性が見てとれる。すなわちそこでは、「『世界』とか『中央公論』」（見田 1976: 5）といったいわゆる「総合雑誌」に照準した上で、「その外」が志向されるのである。それはしばしば、具体物として現出している現実態としての総合雑誌の外――たとえば「ＰＲ誌、業界誌、運動誌、専門誌、情報誌、男性誌、女性誌、生活誌」（見田 1985: 7）――に真に論壇的なもの、いわば理念の水準に潜在している可能態としての論壇を探るという様式をとる。しかし、こうした共時的な言及の仕方もまた、実は論壇時評なる様式にその生成期から組み込まれてきた一つの系譜と位置づけることができる。1931 年 11 月に新聞で初の論壇時評が『東京朝日新聞』に掲載された際、評者である猪俣津南雄は、いわゆる総合雑誌の批判、ならびにそれに定位する「論壇なるもの」の批判を以て筆を起こしている。

> 第一の特徴。ほとんどすべての真理は、そして当面もっとも必要な真理は真理ほど「論壇」から駆逐され排除されてゐる。……
>
> 第二の特徴。駆逐された諸真理に代つて、あらゆる非真理が、偏見が、独断が、せん動が、あゆが、説法が、理論の生けるしかばねが「論壇」へのさばりだしてきた。（猪俣 1931: 9）

その上で、プロレタリア科学同盟が発行し当時啓蒙誌化していた『プロレタリア科学』掲載の論文をとりあげて次のように宣することになる。

> 社会的にもつとも必要な諸真理は、ますます「論壇」以外の領域において成長し、展開し、また獲得されてゆくだらう。（猪俣 1931: 9）

総合雑誌に照準することによって論壇に関連（レリバントな）するものを一旦指し示しておいた上で、その実定性を否定してみせるという両義的・自己否定的な言及＝関連づけ。そして、こうしたある意味決定的な「批判」が初出の段階でなされながら、（猪俣自身の２日目以降の時評も含めて）論壇時評においては今日に至るまでなお総合雑誌のテクストに対する批評が安穏裡に並存してきた[5]。定義が困難なことがどこかであらかじめ受け入れられていながら、それが完全に放棄されることもなく、論壇に関連（レリバントな）する範囲の踏査が繰り返し試みられるなかで、論壇なる全体についてのみならず、そこに属する（べき）テクストや位格の特性についてもさまざまな言及が積みかさねられていく。その際それらが備えるべき特性は、総合雑誌の経験的・具体的様態からの「距離」として措定されるのであり、多くの場合は、総合雑誌の否定的言及というか

たちでさらなる言及＝関連づけを賦活していくことになる。

もとより、具体的な「距離」のとり方については、個々の論壇時評のあいだにかなりのばらつきが見られる。「総合雑誌に掲載される時論的色彩の強い論文」に言及＝関連づけの範囲を限定するような、いわば「典型的」な論壇時評ももちろんある。そこでの距離は、たとえばそうした論文のさまざまな読みにくさ――過剰な物量や晦渋な文体――への違和感の表明や、ルポルタージュや軽読物の称揚といったかたちで示される。一方、そうした論文の論壇への関連性（レリバンシー）をより直截に否定してみせるような「非典型的」な論壇時評もしばしば出現する。そこでは小説や料理本、詩集や写真集に至るまで、過去さまざまなテクストが「総合雑誌の論文」以上に論壇に関連する（レリバントな）ものとして、時評のなかで採りあげられてきた。ただし、かかる「逸脱」をまったき恣意性ととらえることは適切でないし、また評者それぞれの「個性」にのみ帰すべきものでもない。たとえば、政治学者や経済学者に比べて、「逸脱」や「越境」により積極的な文芸評論家・哲学者・社会学者・文化人類学者などが論壇時評の評者へと反復的に登用されていること自体、彼らに寄稿を求める新聞編集者らが抱いている「論壇」なるものに対する了解に規定されていると考えられるからである。編集者によってそうした「逸脱」が半ば期待される程度には、「非典型的」な論壇時評もまたもう一つの「典型」である。

「典型」「非典型」いずれの種類の論壇時評においても、「総合雑誌の時論という現実態がそのままでは論壇たりえない」という了解を媒介にして、関連する（レリバントな）個別具体的なテクストの探索、論理学でいうところの外延の数え上げが散逸的・主観的なかたちでくりかえし励起される。そして、関連する（レリバントな）テクストの探索を反復することによって、論壇なるものの存在が、その一義的な定義＝内包の措定を将来に先送りにしながら、いわば「手探り」で確認されるのである。結果として、「総合雑誌の時論」という虚焦点、すなわち半ば否定されるべき中心の周囲に、種々のテクスト群が言及の都度「論壇なるもの」に関連づけられ、超ジャンル的とでも呼ぶべき様相を呈することになる。

２－３　現実態ならぬ可能態としての論壇の析出

以上見てきた論壇時評の共時的・通時的言及の様式を通じて重要な役割を果たしているのは、実は、論壇時評にみられるような関連性（レリバンシー）の設定が（少なくとも事実レベルでは）端から「不可能なプロジェクト」であるという了解である。かかる了解が時評の中でさまざまなかたちで反復的に言明され、織り込まれていくことによって、逆に暫定的（アドホック）な関連性（レリバンシー）の設定が励起されるという関係にある。

論壇時評欄という言及の様式が生成された1930年代は、『中央公論』や『改造』、『文藝春秋』といった雑誌の登場から一定の年月が経ち、『経済往来』その他の新興雑誌群もかなりの厚みを形成していた時期であった。また（元）学者層のジャーナリズムへの大量進出などもあり、産出されるテクスト群も膨大・多量なものとなっていた。歴史上これまでに何回も言挙げされてきた表現ではあるが、この1930年代もまた「個人の情報処理能力の飽和」を語るべき資格をもった時代の一つではあったのである。

しかしながら、こうした「情報処理能力の飽和」「不可能なプロジェクト」という了解は、事後的言及を通じた論壇なるものの措定を決して妨げるものではなく、むしろそれを賦活する条件であったことに留意する必要がある。様

式に沿ったかたちで言及という実践が試みられる過程で、現実態としては種々の困難や不可能性が了解され、主題化されることによって、却って可能態としての論壇なるものが反実仮想的に措定されるという構造になっている。論壇時評なる様式においては、論壇なるものは、その内包の一義的定義は先送りさせつつ、それに関連するもの（メディア・テクスト・位格など）をその外延として数え上げていくことによって措定されてきた。すなわち、実際の言及＝関連づけによって関連性が設定されているテクスト群の背後に、まだ実際には言及＝関連づけされていないが本来は関連性が設定できる（はず）の潜在的なより広い存在が感取せられることによって、論壇なるものは措定される。先に挙げたさまざまな事実としての不可能性は、この実際の言及＝関連づけ（の失敗）と潜在的なより広い言及＝関連づけとの落差を意識させるものとして機能してきたのである。

通時的言及のパターンとして、論壇時評においては繰り返し「論壇の変質・消滅」「いまはもうないものとしての論壇」が言及されてきた。共時的言及のパターンと併せて検討してみると、今や両者を整合的に理解することができよう。

共時的言及のパターンにおいて、論壇なるものは、内包の定義を先送りしながら、種々の要素についてその関連性を設定し外延の算え上げを続けることによって、潜在的なもの・反実仮想的なものとして析出する。一方、「変質・消滅」という通時的語り口は、懐古的視線を持ち込むことによって、この共時的言及のパターンをいわば時間軸上に投影したものといえる。すなわち過去の「かつてあった論壇」が、共時的言及のパターンにおける潜在的・反実仮想的な論壇なるものに該当するのである。「変質・消滅」によって「本来の論壇」が過去へと投影されれば、今現在の時点で論壇なるものの措定・数え上げに齟齬を来したとしても、論壇なるものとしての了解可能性は将来に対して開かれたままになる。ある意味で「変質・消滅」を言挙げすることこそが「論壇」なるものの「延命」に棹さす行為であるともいえる。

3　雑誌短評という坩堝――1930年代のもう一つの言及の様式

だがここまでの議論は、論壇時評なる言及の様式に注目するかぎり、その生成期から「論壇なるもの」をめぐる特異な歴史的想像力――具体的なテクストを措定し数えあげる過程で、「かつてはあったが今はないもの」として反実仮想的に「論壇」を設定することにより、将来の関連性の設定に自由度を残しておくというそれ――が働いていたことを確認したにすぎない。かかる言及＝関連づけの様式が生成されるに至る歴史偶有的な条件は未だ詳らかになっていない。また大塚いうところの一面記事的語り口が「論壇」に「典型的」なものへと擬せられる（かかる初期設定があればこそ、あえて「非典型的」テクストに論壇との関連性を設定してみせるという所作が有意なものになるわけだが）に至る機制についても言及されていない。

こうした問いに接近するため、以下注目するのがやはり新聞紙上での言及＝関連づけの様式である「雑誌短評欄」である。「論壇」なる語が「間テクスト性」の含意を獲得するにあたっては、具体的な言及という実践が充分に稠密に行われる必要があった。その際、論壇時評と「似て非なる」言及＝関連づけの様式であるこの雑誌短評欄こそが、「文壇」と「論壇」とを混ぜ合わせ、ジャンル横断的な言及を活発にする坩堝として

働くことによって、結果として「論壇なるもの」についての了解の転換を促したと考えられるのである。

そもそも同じく「壇」の語を共有しながら、「論壇」なる語彙が、言及＝関連づけによってその関連性（レリバンシー）の範囲が設定される程度に抽象的なものとして想定されるようになったのは、文壇に比べてかなり遅かったと想定される。たとえば小学館の『日本国語大辞典』によれば、「文壇」が「作家・批評家などの社会。文筆家の社会。文学界」の意に限定され、確認されている初出も江戸期にまで遡る（1844 年の野村篁園『篁園全集』）のに対し、「論壇」の初出例は「意見を論じ述べる壇。議論を戦わせる場所」という今日でいえば物理的な「演壇」にあたる含意のほうが先行しており（1886 年の末弘鉄腸『雪中梅』）[6]、「議論を戦わす人々の社会。評論家の社会。言論界」の意での初出はそれにかなり遅れる（1905 年の角田浩々歌客「此興詩を論ず」）[7] のである。いずれにしろ、「界・社会」の意で「壇」が用いられるのは、「論壇」よりも「文壇」の方が相当に早い。したがって、将来「論壇」に「界・社会」の意味が付与されていくときにも、先在する「文壇」との意味論上の分立関係が常に問題となってくる[8]。

「論壇」なるものを実体的にとらえる限りは等閑視されることが多いものの、実はこうした「文壇」との継受関係において重要な媒介項の役割を果たしたと考えられるのが、以下に見る雑誌短評欄なのである。

3－1　「豆戦艦」――匿名短評流行の契機

匿名評者が雑誌などを小さなコラムで批評する様式が新聞紙上で流行するきっかけとなったのは、1931 年 12 月から『東京朝日新聞』で連載が開始された「豆戦艦」欄であった。同紙で「論壇時評」が開始されたのは同年 11 月のことであるから、この 2 つの様式はほぼ同時期に生成され、以後 36 年 5 月に「豆戦艦」欄が終了するまで約 4 年間併載されていたことになる。この「豆戦艦」欄は、言及の対象とするテクストや種々の構造的特性に関して、「論壇時評」欄と特殊な対応関係にあり、「論壇なるもの」についての了解の転換を分析する上で重要な位置にあるといえる。

「豆戦艦」については、その主たる匿名寄稿者である杉山平助に焦点をあてるかたちで、すでに山口功二や森洋介のすぐれた先行研究がある（山口 1974，山口 1975，森 2002，森 2003）。こうした先行研究にも依拠しながら、当該コラムを導入として、まず新聞掲載の雑誌短評欄の沿革を概観していこう。

「豆戦艦」は匿名評者による雑誌短評欄で、『東京朝日新聞』に 1931 年 12 月 21 日から 36 年 5 月 22 日まで連載された。論壇時評欄や文芸時評欄と同様に、朝刊のいわゆる学芸欄に掲載されている。副題には「～月の雑誌から」とあり、その内容は、1 回あたり 1 ～ 3 誌を採りあげて、雑誌毎にその内容を 6 ～ 700 字程度で批評するというものである。対象となる雑誌はきわめて幅広く、総合雑誌、文芸雑誌から経済誌、婦人雑誌、大衆誌、専門誌、左翼雑誌、趣味の雑誌、受験雑誌などにまで及んでおり、最盛期には 1 月に 9 ～ 10 回掲載されたこともある。

こうした短評欄と並んで文芸時評や論壇時評もそれぞれ月 4 ～ 5 回にわたって掲載されていたことを考え合わせると、30 年代前半の『東京朝日新聞』の学芸欄には、相当の頻度で、雑誌に掲載されたテクストに言及する何らかの記事が見つかったことになる。

さて、「豆戦艦」では論評されるテクストの内容も限定されておらず、総合雑誌の場合であ

れば小説などの創作、随筆やルポなどの読み物、論文がそれぞれ数本とりあげられて短評が付された。したがって、言及されるテクストが「豆戦艦」と「文芸時評」、「論壇時評」とで重なるという事態も当然起こる。ただし前者は匿名批評であり、スペースも少ないことから、たとえば次のような惹句を多用した断定調の文体が採用されていた。

> マルクス主義と自由意思の問題（大森義太郎）……そこらの通俗解説書にでもザラにころがつてゐる程度の議論だが、こんなことを論じてるのが今日の学界レベルなのかと思ふと、我々門外漢も大いに意を強うするに足る感のあるのは滑けいだ。（氷川 1933b: 5）

そして、こうした独特の文体が（匿名批評にもかかわらず）評者の杉山平助をして盛名を博せしむる一因となる。

「豆戦艦」の代表的な評者であった杉山の匿名はほどなくして暴露される。しかし、「豆戦艦」において文学的な小説・評論から政治・経済的な論文、風俗をあつかった随筆までをひとしなみに批評しえた「評論家」杉山平助の活動範囲は、その暴露によってかえって拡大し、やがて総合雑誌・新聞・文芸雑誌・婦人雑誌などきわめて広汎なメディアに登場していくことになる（山口 1975: 79）。と同時に、創作についても論文についても同一地平で言及しうる批評――「対象領域の面白さを捉えつつ渡り歩くという超ジャンル批評」（山口 1975: 77）なる様式もまた、各新聞へと散種されていくのである。

３－２　雑誌短評による論壇時評の代補

この超ジャンル批評の苗床となったのが、「豆戦艦」の成功以来、各新聞に常設されるようになった匿名批評欄であった。この新聞の匿名批評欄において雑誌掲載のテクストへと言及するという様式は、1933 年に登場した新聞紙上の論壇時評が 37 年までに順次消滅していくなかで、それをいわば代補するかたちとなる。

たとえば、『読売新聞』は 33 年 2 月から論壇時評を掲載するが、同年 11 月からは匿名批評欄「告知板」においても「豆戦艦」と同形式で総合雑誌も採りあげられるようになっていた。論壇時評欄自体は 1935 年 10 月を最後に中絶するが、その後も「告知板」の後進である「壁評論」のなかで、「×月の諸雑誌」と題した雑誌ごとの批評欄が月数回掲載され、総合雑誌に掲載される小説・随筆・論文などのテクストがそれぞれ 3 ～ 4 行ずつの寸言によってひとまとめに言及されるかたちが続いた。また論壇時評欄がわずか 2 ～ 3 回の試行の後、34 年 2 月に消滅した『東京日日新聞』の場合も、入れ替われるように同年 1 月 27 日に新設された匿名批評欄「蝸牛の視角」が、文芸雑誌や総合雑誌から特定のテクストを採りあげ、言及するスペースを提供することになった。

一方、その筆致に対する批判の高まりもあってか、『東京朝日新聞』の雑誌短評欄「豆戦艦」は 36 年 5 月 22 日に終了し、杉山を含む社外の識者が実名で評論する「槍騎兵」欄に置き換えられる[9]。「論壇時評」が不定期掲載になったこともあり、同欄では同年 9 月から雑誌別の実名短評が行われるようになるが、これも翌 27 年に「論壇時評」ともども一旦中絶する。しかし、2 年後の 39 年 11 月に「槍騎兵」のなかに竹賢人名義の匿名雑誌短評欄が復活し、総合雑誌掲載の各種テクストがふたたび言及されることとなった。

さらに敗戦後、新興総合雑誌が簇生する一方で、用紙配給の影響で新聞紙面が非常に限られ

た時期に、論壇時評欄の復帰以前に新聞紙上で雑誌掲載のテクストに言及する様式として多用されたのも、やはり匿名批評であった。その意味では、雑誌に掲載される多様なジャンルのテクストに言及して、それぞれに短い語句で批評的評価を付与していくタイプの雑誌短評は、時期的には、1930年代に論壇時評なる様式が生成・普及するも一旦中絶し、戦後になって確立するまでのいわば揺籃期に対応するかに見えるのである。

3－3　論壇時評と雑誌短評との相互（非）通有

しかし、記事としての長さこそ違え、雑誌のテクストについて新聞紙上で言及する様式という点では変わるところがない「論壇時評」と「雑誌短評」は、果たしてどの程度「2つ」の様式として区別されていたのか。後者の代表例である「豆戦艦」は、連載開始から半年ほど経過した32年7月25日に、「筆者申す」と題して記事の位置づけや狙いを明らかにする一文を掲載している[10]。

> この欄は新聞記事としての性質上、また読物として興味をも要求されてをります。従つてこの欄に厳密な学術的批評の態度を求められるのは途方もないお門ちがひです。
>
> この欄はその建前からこゝに問題とする一切の雑誌の存在を肯定してかゝります。その商業的立場をも顧慮せねばなりません。「キング」や「朝日」と共に、左翼雑誌の存在をも肯定し、できることならその一冊もよけいに売れる事を助けたいのです。何も辛辣さや悪口が売物ではありません。しかし読書に対する忠実はあくまで守らねばなりません。従つて広告文そのままのお役目はつとめかねます。
>
> しかしながら、いったいそんな思想的立場といふものがあるもんでせうか。そこが蛙が蛇を飲む手品といふものでせう。（横手1932: 9）

匿名雑誌短評欄は、単なる雑誌内容の紹介にとどまらず、読み物として独自の価値を志向する。だからこそ、辛辣さや悪口とも見まごう短くも印象深い批評や感想が不可欠となる。それは学問的な批評の手続きとは異質な操作であり、それゆえに、この短評記事は「サロン的批評」として「れつきとした文芸時評や論壇月評」と区別される必要があるのである（横手1932: 9）。ここでは、匿名雑誌短評欄と論壇時評（や文芸時評）との関係が、読みもの的価値と学術的価値とをそれぞれに追求する、ある種の「水平分業」の相で一旦は提示される。

ただし、実際の言及＝関連づけに注目すれば、そうした「分業」の相での区別は必ずしも貫徹されない。例えば、制度的にその目的が雑誌批評に限定されていない匿名短評欄にまで視野を拡げると、稀にではあるが「れつきとした」論壇時評とのあいだに、より実質的な言及／被言及の関係が生じることがある。すなわち、その瞬間は「分業」の相貌が崩れ、境界線がほころぶことになる。

> 室伏高信は、こんにちなほ大総合雑誌が経済論文をあがめたてまつてゐて、いつかう政治論文に力を致さないのを見て、理由のある不平を漏した。（潮1935: 10）

こゝでちょっと注意しておきたいが、しばらく前の本欄の「壁評論」に矢内原氏の論文を批評するにあたつて……匿名批評などわざわざ取り上げるのは如何にも仰々しすぎるが、かういふ知りもせぬでたらめは訂正して

おいた方がいゝと思ふから、序でに書いておく。（大森 1935: 4）

どちらも『読売新聞』からの引用で、前者は同じ文芸欄に3日前に掲載された論壇時評（「二月号の雑誌から」）に匿名短評欄が言及した例、後者は逆に先に掲載された匿名短評欄に論壇時評が事後的に言及した例である。いずれも、新聞外のテクストに言及する際に、併せて当該テクストに言及した新聞紙上の批評・評論に対してもさらに言及する点で、共通している。このことから、2種の事後的言及様式によって設定される関連性（レリバンシー）の地平が交叉しうる――あるいは重なりうる――ものとして了解されていることがうかがえる。別なる「テクストに言及する（メタ）テクスト」もまた、自身にとっての「関連する（レリバントな）＝言及される（べき）テクスト」になる可能性[11]。とはいえ、「わざわざ取り上げるのは如何にも仰々しすぎる」とわざわざ注記しなければならない程度には、論壇時評による関連性（レリバンシー）の設定と匿名短評によるそれとの「種差」についての了解がなおそこにはたらいているのも事実である。そこには似て非なるものとして、あるいは非なるが似るものとして、論壇時評と匿名短評という2種の事後的言及様式のあいだに、微妙な距離が看取せられていたことがうかがわれる。

この微妙な距離が作用することによって、2つの言及様式はある時は「使い分け」として、またある時は「侵犯」として了解される[12]。かかる微妙な距離は、先に指摘した論壇時評揺籃期において匿名短評が占めていた位置価にどのようにかかわってくるのか。

4　言及＝関連づけの様式にとって1930年代が持つ意味――為した文脈と消えた文脈

区別されかつ往還可能なものとして、1930年代に論壇時評的言及様式と短評的言及様式がほぼ同時期に成立したことは、その類縁性と異質性のそれぞれに注目することで二つの意義を持つ。前者に注目した場合、論壇時評なる言及の様式が現在に至るまで反復している特性が30年代に成立した当時の文脈を、短評という補助線を引くことによってより立体的に理解することができる。一方、後者に注目した場合、現在まで論壇時評が更新されてくる過程で喪われていった30年代固有の条件、様式レベルでの連続性ゆえに不可視になっている側面を対象化しうる。すなわち、現在の論壇時評なる様式を「為した文脈」とそれによって「消えた文脈」は、30年代の短評が具えていた様式上の特性との異同を検討することによって明らかになるのである。

4－1　市場への志向――文脈のレベルでの異形性

論壇時評なる事後的言及の様式は、文芸時評などに比較して、雑誌掲載論文を中心とした個々のテクストの「内容」のみならず、その「文脈」についてもより頻繁に言及する。前述の通り、特に「総合雑誌」という現実態はしばしば論壇時評の特権的な主題としてとりあげられてきた。総合雑誌に焦点をあてることで関連する（レリバントな）テクストの探索が促進されることに加えて、その実定性を否定する（たとえば「現実の総合雑誌は論壇の体をなしていない」と言挙げする）ことによって、反実仮想的に論壇なる全体の措定を促す効果ももつためである。

一方、稀少なスペースにもかかわらず、匿名

短評もまた個々のテクストのみならず、その「文脈」についても大きく取り扱う傾向がある。たとえば森洋介は、「豆戦艦」の初期には唯一の評者であった杉山平助について次のように述べている。

> つまりその眼は作品や作家の批評であることを越えて、出版界や編輯陣といった文学の環境へと向かってゐたわけで、その意味での「ジャーナリズム（に就ての）批評」でもあったのだ。（森 2002: 8）

実際雑誌単位での批評が多かった「豆戦艦」においては、少ないスペースのなかで、折にふれて、論文や小説といった個々のテクストのみならず、雑誌全体の編集方針など、その文脈的情報にまで言及が及んだ。

> 従来の「婦女界」は「婦人公論」と「主婦之友」の中間を行くものゝように見えたのであるが、それが最近いちじるしく後者の色彩を多量に加へることによつて、従来の特色を失ひつゝあるがごとく見えるのは惜しい。（氷川 1932: 5）

個々のテクストに限らず雑誌総体にも言及対象としての単位性を認めるこの特性は、『読売新聞』などの他紙が匿名短評欄という様式を導入し、たとえば「告知板」や「壁評論」欄といった匿名短評欄のなかで雑誌別の短評を行った際にも踏襲された。

こうした言及がなされるとき、そこで想定される話者の立ち位置は、テクストごとの「内容」に志向する意識的・選択的な読者というよりは、目次をなぞる浮動層的な読者、ないしは自らは執筆することなく企画を立て寄稿を依頼する編集者と近いものになるだろう。

その一方で、「文脈」への言及という観点からみて二つの言及様式には次のような相違点も見られる。まず論壇時評という様式においては、個々のテクストに関連する（レリバントな）「文脈」の単位は、必ずしも個別具体的な雑誌にとどまらず、そのいわば「類概念」たる「総合雑誌」にまで拡張されて言及されることが多い。もちろんこの「総合雑誌」は、現実態としてさまざまな矛盾や限界がそこに「発見」されるかぎりではイデアールなものではないが、テクストという「個」、個別雑誌という「種」の上位にある「類的」な存在ではある。だからこそ、それは可能態としての「論壇なるもの」にほぼ対応するものとして観念される。

これに対して、雑誌短評という様式においては、個々のテクストに関連する（レリバントな）「文脈」の探索は「種」たる雑誌の水準までで停止することが多い。これはそもそも雑誌ごとの批評という形式に規定されていること、また、与えられた紙幅に強い制約があることを考えれば当然である。そこでは、「総合雑誌」などという「類的存在」は措定されにくいため、それに対応した「論壇」なる抽象的・理念的存在も後景化したままとなる。むしろ、1930 年代の匿名短評という様式において、より直接的に「文脈」の位置に措定されているものは、個々の雑誌にとって具体的な環境となる「市場」であったと考えた方が理解しやすい。ここで措定される「市場」は、「商業主義批判」といった抽象的なレベルでは処理しきれぬほど実質性を具えたものとして前景化している。たとえば代表的な匿名短評欄の書き手である杉山平助は『読売新聞』に雑誌界の動向について寄稿して次のように述べている。

> 従つて編集者がお互に、やったな！抜かれ

たな！といふやうな神経の対立は、文化の根強い進展と次第に縁の遠いものになり、たゞその火花を散らすやうな競争が一種の玄人的な興味を刺激するやうな状態に立ち至つてゐる。おそらく雑誌そのものがコムマーシアリズムから脱却しない以上、編集方針がこゝから逸れることは、望みのうすいことで、私などは、もうかうなつた以上は、どこまで行けるものか、飽くまで徹底的にやつてのけるのがいゝとさへ思つてゐる。（杉山 1933: 4）

擬悪趣味にも映るこうした表現[13]が一応新聞記事として成立し、かつこうした記事自体が人気を博し消費されていくような文脈の中で成立していたものが戦前の雑誌短評的な言及様式だったのである。

注意すべきは、抽象的・理念的な論壇が後景化している場合、「論者」に対する主体性・内発性は関連する（レリバントな）要求とならない点である。テクストに関しても需要と供給の合致、その効果こそが主題化され、そこでの「請負」的な性格について（次節にて詳述するような）有微（スティグマ）性が認められることはない。

こうした現在から見ると異形とも映る、雑誌短評なる言及の様式と相補的に成立したという歴史的文脈が分離・捨象されることによって、戦後の論壇時評なる様式では、大塚言うところの「一面記事化」――読者による文脈の読み取りを要求し、それゆえしばしば「読みにくさ」として現象するようなそれ――が進行することになる。

４－２　超ジャンル的メタ・テクストの消費――読者のレベルでの異形性

２―２でも論じたように、現在までつづく論壇時評なる事後的な言及様式もまた、しばしば「超ジャンル」の様相を呈する。そこでは、論壇なるものへの関連性（レリバンシー）を認められうるテクストの範囲について「評者の裁量」に委ねられるかたちで一定の自由度が組み込まれているからである。前述のとおり、その言及＝関連づけの対象を「総合雑誌に掲載される時論」に限定する傾向が強い「典型的」な論壇時評においても、そこで実際に採りあげられるテクストの範囲は相当多岐にわたる[14]。さらに、そうした「総合雑誌の時論」を指標に「論壇」なるものの関連性（レリバンシー）を設定することそれ自体に疑義を呈する傾向が強い「非典型的」な時評ともなると、そこで言及される対象は専門誌、機関誌、大衆誌、趣味的雑誌に掲載されたテクストから果ては小説や随筆にまでおよぶことさえある。

このように論壇時評という言及＝関連づけの様式から検討すると、そこで措定されることになる論壇なるものは、評者の関心によって対象領域を横断していく超ジャンル性とでも呼ぶべき外貌を有していることがわかる。論壇時評のかかる外貌についても、30 年代というほとんど同時期に成立した雑誌短評なる補助線を引くことで、関連するいくつかの要素を指摘することができる。

短評欄にて雑誌単位の批評が行われることで、個々のテクストを包摂する編集方針などの「文脈」への関心も前景化されたことはすでに述べた。と同時に短評欄での雑誌評は、当該雑誌に掲載される諸テクストをジャンルにかかわらずひとしなみに扱う平面を出現させたことをも意味する。総合雑誌が採りあげられる回には、政治・経済・思想といった分野の難解な論文から随筆、小説まで、それぞれが同一コラム内で等しく取り扱われ寸評を加えられていく。しかもそこには単なる要約にとどまらぬ、「読物としての興味」を誘う「片言隻句」（横手 1932: 9）

が挟まれるのである。

もちろん、かかる短評欄の様式が、超ジャンル的ジャンルとしての「論壇」の了解可能性を生みだしたなどという因果関係を考えているわけではない。とはいえ「豆戦艦」式の短評欄での雑誌評が（少なくとも様式として他紙にも波及していく程度には）人気を博したことを以て、すでにある種の心性を備えた消費者＝読者の存在がそこで前提されていたことの傍証として捉えることは可能であろう。すなわち「豆戦艦」式の成功は、テクストごとにその「内容」を志向して熟読するのでなく、目次をなぞるようにそのテクスト間の関係の妙や評判を消費することに快を見出す心性が読者の側に成立しているという想定が、30 年代当時存在していたことを裏書きするように映るのである。かかる「消費」には、実際の雑誌を手にとらないケースすら含まれる。言及すること自体に、すなわちテクストに言及するメタ・テクストそれ自体に欲情しうる「読者」の存在を引き当てにできた可能性[15]。1930 年代の短評欄の隆盛が示唆するところはこれである。

30 年代における雑誌短評との様式上の区別／侵犯を念頭に置いたときに浮上するのは、論壇時評における言及＝関連づけもまた、メタ・テクストそれ自体の即自的・自己完結的な消費――短評欄同様、批評対象となっているテクストとは独立に批評そのものを読むことに快楽を覚えるようなそれ――に水路づけられるかたちで進んだ可能性である。この可能性によって論壇時評なる様式が今日まで孕んでいる自由度、すなわち「超ジャンル性」が準備され励起されてきたとすれば、この 30 年代固有の条件は、その後の言及＝関連づけのありようを規定し、かつ解釈の資源を提供する「為した文脈」の役割を果たしたことになる。だが、この論壇時評それ自体が即自的・自己完結的に消費される可能性は、雑誌短評欄との二重構造が後景化していくとりわけ戦後においては、ある意味「消えた文脈」ともなっている。具体的には、「論壇時評」もまた即自的・自己完結的に消費するに足るテクストたりうるという側面が潜在化し、それが引用対象となるテクストに対して補足的位置にあることを強調するような様式上の特性がことさらに顕示されるようになるのである。

たとえば、戦後の論壇時評においては、そこで引用されるテクストについては自発性・主体性が強く求められるのに対し、時評それ自体についてはその自発性・主体性が相対化されるという一見奇妙な対照がしばしば見られる。中野好夫による時評が、「編集部からの注文でとか、出題でとかいった風の断り書ではじまる論稿」（中野 1977b: 7）が多いことを批判しつつ、評者自身の立場については「妙なことで月評を担当する仕儀となった」「お気に入らねば、明らかにそれは人選の誤りなのだから、社の方へ不服を申し入れてもらいたい」（中野 1977a: 5）などと、それが「請負業」であることをことさらに顕示するのはその典型例といえる。あるいは、「評者」が時評内で自己のテクストについて言及したり、自論に向けられた批判に応答したり、さらには時評内で言及されたテクストの「論者」に同一紙で反論のスペースが提供されたりする例も実際には極めて少ない[16]。このこともまた、論壇時評なる様式において「言及されるテクスト」と「言及する（メタ）テクスト」とのあいだの階層性・一方向性が特に戦後において効果的に維持されてきたことを示唆しているといえる。

こうしたテクストとメタ・テクストとの階層性の強調がきわめて歴史偶有的な特性であること、――すなわち、こうした戦後的なものとは

異質な「消えた文脈」とでも形容すべきものが30年代当時の二重構造下の「超ジャンル性」には孕まれていたこと――をうかがわせる、ひとつの傍証を見てみよう。33年の7月、『東京朝日新聞』は学芸欄に4回にわたって大森義太郎の「論壇の文章」を連載する。

> いつたい、論壇の誰れが文章がうまい彼れが文章がうまいといつたところで、文章を本業にしてゐるといふのも変だけれど、人達、つまり文壇の連中に比べれば、まづい。（大森 1933a: 5）

このように断ることによって、テクストの内容とは切り離して、多数の「論壇人」の文体を検討することが可能となっている。そこでは、たとえば三木清の文体については次のように形容される。

> 弱くなよなよとして女の文章みたいである。それに、なるほどよく推こうされてはあるが、文章の輝きといふものに乏しい。（大森 1933b: 9）

現代において、同じようなメタ・テクストが編集部より発注され、記事として成立しうるかを考えれば、30年当時の文脈の異質性が――すなわちそこではメタ・テクストの即自的・自己完結的価値がより直截に志向されていることが――うかがわれよう。ただし、改めてくり返すならば、かかる異質な文脈は、論壇時評なる様式を介して現代まで作動している言及＝関連づけとまったく関連性がない（イレリバントである）わけではない。それは、後代に解釈の資源を提供することによって、論壇時評なる様式が今なお帯びている「超ジャンル」的な特性をその都度賦活してもいるのである。

4－3　素人的万能性の引き受け――評者のレベルでの異形性

いったい超ジャンル化の傾向は、読者の潜在的嗜好ばかりにではなく、短評欄・論壇時評欄双方に登場する「評者」の側の「出自」にもすでに現れていた。そしてテクストに言及するメタ・テクストへの関心、その商品価値が高まるなか、やがてそうした「出自」を含めた「評者」の位格もまた、言及＝関連づけの様式のなかで前景化・主題化する。

たとえば、匿名雑誌短評欄「豆戦艦」の評者であった杉山平助については、すでに山口、森ともにその執筆活動の原点の特異性に注目している（山口 1974: 44，森 2002: 9）。1929年に『三田文学』に掲載された「下層一断面」なる杉山の初期作品の末尾に、象徴的にも吉野作造との邂逅譚が付されているのである。そこでは、かつて文壇への異和を表明した杉山に対して、吉野が評論を奨める場面が記される。その上で施療病院の風俗を描いた「下層一断面」は「小説態の評論、或は評論態の小説」（杉山 1927: 54）と形容されるのである。一応は文芸畑の出自といえばいえ、杉山の執筆活動は「『文学』という対象の唯一性への懐疑から始まっている」（山口 1975: 77）。

あるいは30年代の「非典型的」な論壇時評を見ると、その「評者」のなかにも超ジャンル的な志向性を示す人物がみてとれる。たとえば、新聞の論壇時評欄において雑誌の「文芸時評」に言及した「評者」である大宅壮一は、帝大新人会に所属し社会学科を中退した後、新潮社の『社会問題講座』の編集にたずさわるが、直接その名が世に出たのは、前述の通り、26年の「文壇ギルドの解体期」（大宅 [1926]1981）に

はじまる一連の文芸評論（作品に照準しないという意味では文壇論）をつうじてであった。一方、学術畑出身の「評者」たちのなかにもジャンルを横断して執筆活動を行う者が出てくる。哲学論文や随筆にも言及する「非典型的」論壇時評の書き手でもあった大森義太郎の場合、本来経済学が専門ながら、『東京朝日新聞』では文芸批評まで担当している。あるいは 34 年 2 月に『東京日日新聞』で論壇時評欄を担当した戸坂潤も、同年 6・7 月にかけて同紙で「創作評」を担当し、「街頭社会学と民族社会学」と題して雑誌小説を批評している（戸坂 1934: 15）。

大森や戸坂のように元来それを業としていない者が文芸批評に進出する現象は、文芸雑誌などでも当時から「局外批評」の問題として注目を集めていた。それは既存の文壇なるものとの対峙関係で捉えられ、その新しい価値基準の導入によって、評価と仕事の差配が部内者すなわち専門家のなかで完結していた文壇のギルド的自己完結性を動揺させる存在として捉えられていた。だが「局外批評」の名付け親でもあるらしい大宅壮一にしろ[17]、あるいは同じく文芸畑から出発した杉山平助にしろ、批評、すなわちテクストへの言及を通じてギルド的なジャンルの超越を志向する点では、「文壇から論壇へ」あるいは「論壇から文壇へ」とその方向こそ違え、大森や戸坂らと親和的な存在であったともいえる。実際、これらの位格に紐づけられるかたちで展開された超ジャンル的な志向性は、後年に見られる「非典型的」な論壇時評の雛型として、すなわち、総合雑誌の時論の「外」にあるテクスト群を関連する（レリバントな）外延として数え上げることによって、内包の実定的な定義は避けたまま「論壇なるもの」の存在を措定するような言及＝関連づけの様式の雛型として位置づけることができる。

もちろん、こうした無制限な言及対象の拡大については、当時から批判も寄せられていた。たとえば雑誌ごとに論文にも小説にも等しく寸評を加えていく「豆戦艦」のすぐ脇には、次のように述べる今井登志喜による論壇時評が併載されていた。

> 各論文の批評家は仮令通俗的な時であつても相当に夫々の専門家であるべきである。その意味から多くの論文を総捲くりにする如きは本来無理である。それは時として無暗に撫切りにして痛快至極であるが、屡々非専門的な見当違ひに陥るのである。従つて此論壇時評の如きは厳密な意味の批評ではなく、寧ろ非専門的な一読者のその時の問題に関する読後の感想である。（今井 1935: 9）

さまざまな専門のテクストに言及することを様式として強いられる論壇時評は、ここでは本来は不可能事と想定されている。それは「読後の感想」の相に割り引かれることによって辛うじて意義が認められるようなものである。その点を等閑視すると、それは単なる「撫で切り」「見当違い」ということになる。ある意味で、論壇時評という事後的言及の様式のなかで、戦後今日まで引き継がれる典型的な割引戦術――そこでは論壇に関連する（レリバントな）範囲の設定が本質的な不可能であることがあっさり先取りされ、時評なる営みはたとえば前節でも見たような「請負仕事」といったエクスキューズのもとにようやく許容される――ともいえる。

しかしながら、短評欄という補助線を引くと次の点が見えてくる。すなわち、この時代の超ジャンル志向の強い「評者」たちは、ある意味で論壇時評や短評欄という様式が強いることにもなるこの領域横断性について、後代よりも積

極的な意義を認めるのである。そしてその点に注目してはじめて、1930年代の事後的言及様式――それは論壇時評と短評欄との二重構造と捉えられる――のなかで析出する「評者」なる位格は、この時代固有の相貌を帯び、前景化することになる。

「評者」たちが自らの超ジャンル志向の批評に積極的な意義を認めていることは、そうした志向性を「評者」自身がしばしば「批評論」として独立に論じていることからもうかがえる。たとえば戸坂は、自らが「局外批評家」――すなわち文壇の局外にありながら文芸批評もする存在――に算えられた際、その立場を次のように論ずる。

> 一般読者はそれぞれの専門に就いては多くは素人だが、所が不思議なことには、この諸専門部分を統合し統一した世界に就いては、立派な評論家なのである。そこには常識（良識・「健全なる理性」等々）がある。（戸坂 1935a: 21）

まず戸坂は、専門論文も時事評論も創作もひとしなみに読む超ジャンル志向の批評の基礎に「一般読者」、「素人」を置く。これは一見すると、前述した今井の立場と変わりがないようにも見える。しかしながらそれは割引の様相を呈しない。核となるのは各人がもつ「常識」である。

そこでは日常性に根ざした「普遍的な批評の体系」「総合的で統一的な批評そのもの」（戸坂 1935a: 21）なるものの存在が前提される。「素人」的万能性は闇雲に卑下されるべきものではなく、「評者」としての位格はいまや固有の価値を具えた、日々陶冶されるべきものとして位置づけられる。このように自己の立場を定義した戸坂が別稿「常識・合理主義・弁証法」の冒頭で「近来、常識といふものに多少反省を加えてゐるもの」に挙げたのが杉山平助だとされる（戸坂 1935b: 12，森 2003: 103）。

一般的な論壇時評においては「個人による情報処理の飽和」についての了解が、論壇の措定の重要な契機となっている。現実態として「読まない」「読み切れない」ことのたえざる確認が、可能態としての論壇なるものの措定を促しているということである。しかしながら30年代の言及様式に見られる超ジャンル性志向の批評は、専門性に閉じていない個人の資格、すなわち位格に強い負荷をかけることによって成立している。それは、一旦エクスキューズを入れてからあらためて多様なテクストへと言及していくことになる現代の論壇時評者に措定されている位格とは、かなり異質な存在なのである。

5　終わりに

以上見てきたように、30年代に事後的言及様式として論壇時評と並行して生成・普及した短評欄という言及様式は、この時期の論壇時評欄という様式の成立を考察する上で、重要な位置価をもっていると考えられる。

まず、論壇時評なる言及がいまだその様式性を充分に確立していなかった頃から、短評欄という様式は、文壇にまで渡るような超ジャンル的な言及を励起することによって、「論壇」なる語の「テクスト間の関係性＝論調」なる意義を確立させる働きをした。日本において「壇」なる語によって指示されてきたきわめて微妙な言及＝関連づけの特性の更なる分析のためには、かかる「文壇」と「論壇」の継受関係について1930年代以前にも遡及するかたちでさらに立ち入った検討を加える必要があろう[18]。

その一方で、短評欄なる言及＝関連づけの様

式への着目は、現在の論壇時評という様式を過去に投影する事によって見えにくくなっている歴史的な文脈を推測するためにも有益な作業となりうる。こうした現在からは死角に入っている過去の文脈――論壇以上に実定的な「文脈」として措定される「市場」、テクスト以上にメタ・テクストを欲望するものとして想定された「読者」や万能性を引き受ける「評者」の位格など――は、現在の論壇がどういった要素を捨象することによって成立しているかを考える上でも重要となる。

上記二つの方向性を換言するならば、これは、論壇時評／雑誌短評の二重構造として成立していた1930年代の言及＝関連づけの様式性が、現在まで続く「論壇なるもの」の言及様式の「起源」であると同時に「反起源」でもあったということを意味する。それを「反起源」と称するのは、単に現在から見て「論壇」とは異形な性格を帯びていたからというだけではない。「文壇」を依り代にするかたちで間テクスト性なる「壇」の含意を獲得する際、実際には当時の言及様式は後代にはないある種の「異形性」――杉山や大宅、大森や戸坂らが体現していた、文脈・読者・評者のレベルでのそれ――を孕んでいた。しかし、後代からの遡及的な視線は、そうした「異形性」を「夾雑物」などとして微妙に馴致した上で、「戦前の論壇なるもの」をさしあたり「起源」として整形する。そして、そうした「起源」への通時的言及が、そこで暗黙裡に設定されている関連性（レリバンシー）の範囲をも超えるような「真に論壇的なもの」の手探りをも励起することになる。結果として、「起源」に言寄せるかたちで論壇の関連性の通時的な範囲を手探りしていく「語り口としての起源」が成立し、あらゆる歴史的な視線は以後「どこからが／どこまでが論壇に関連（レリバント）するか」という問題設定の内に囲い込まれていくことになる。そこで模索し試行される連続／断絶のいずれの線引きも、遠近法的な説話の構造のなかに囲い込まれてしまうという意味で、1930年代は「論壇なるもの」の「起源」であると同時に「反起源」でもある（佐藤 2005: 62）[19]。

30年代以降、こと「論壇」なる語彙の流通範囲においては、前述したような「起源」探し、連続性と断絶性の手探りの探索が日常的に行われるようになる――典型的には「昔はあったが今はない論壇」への言及のかたちで。換言すれば、論壇に関わりがある／ないという区別に基づく関連づけ以外には、文脈としての接続が困難になるのである。杉山や大宅、大森や戸坂の名のもとに実践された言及の様式は、雑誌短評欄と論壇時評欄という様式上の差異を前提としつつそれを侵犯することによって、「論壇」への関連性（レリバンシー）を更新して今日まで続いている折々の言及＝関連づけに対して、結果として解釈の資源を提供することとなり、そこに超ジャンル性という自由度を準備することになった。しかしその一方で、雑誌短評欄と論壇時評欄の並立を前提とした30年代の言及＝関連づけ自体には、本来は後続の論壇時評で展開されていく言及＝関連づけからははみ出すような特性も――「文脈」、「読者」、「評者」といった水準に――孕まれていた。にもかかわらず、それらが事後的に言及＝関連づけされる場合には、かかる異形性が等閑視されるかたちで、せいぜいのところが「非典型的な論壇時評」（という一つの典型）の「起源」として「現在化＝活性化 actualize」（佐藤 2002: 66）されるのである。

とはいえ、1930年代の雑誌短評欄と論壇時評欄という二重構造下において特異な存在であった位格たちは、ほどなくその言及様式から脱落していくことになる。大宅壮一は、その後

評論活動を離れて戦時中は満洲やジャワへ陸軍報道班として活動し、敗戦前後しばらくは農業に専念する。大宅と同様に文芸批評欄や論壇時評欄、まれに短評欄にまで寄稿していた杉山平助・大森義太郎・戸坂潤の3人は、戦後実質的に活動することもなくそれまでにすべて病死または獄死する。大宅壮一が「無思想人宣言」(大宅 1955)によって戦後の自己の活動の再定式化を図る50年代までに、雑誌短評欄に象徴される30年代の言及様式にみられた特徴は整序され、そのことが戦後の論壇時評的な言及＝関連づけのありようを文脈づけ、また解釈の資源を提供することになる。

言及＝関連づけの積み重なりによって更新されてきた社会的カテゴリーとしてとらえることによって、このように「論壇」なるものをとりまく歴史偶有的な布置――30年代以前の「文壇」との継受関係や、30年代以後の短評欄的様式との分立・整序の様態など――をいま少し見通しよくとらえられるようになると考えられるが、その具体的な検討は今後の課題となる。

注

[1] いうまでもなく、ここで言う言及＝関連づけは、定義上あらゆる行為が該当することになる佐藤の言う意味でのコミュニケーションの接続に比べれば、遥かに局限された、実体的で一見素朴にも映る接続の様式ではある。しかしながら、その接続があまりに露骨で可視的であればこそ、コンテクストの指示に付随して更新される論壇なる社会的カテゴリーは、独特の屈曲――本論での議論を先取りしていえば、その存立可能性と不可能性との同時把握とでも呼ぶべきもの――をこうむることになる。佐藤は戦後日本にさまざまなかたちで存在していた「ないけれどもある」「あるけれどもない」ものが90年代以降になって急速に可視化・一元化が進んだと指摘するが（佐藤 2000: 116)、その意味では、それら「ないけれどもある」「あるけれどもない」もののなかでも、本論が採りあげる「論壇」はその可視化を一足早く先取りしてしまったものとしてとらえられるかもしれない。

[2]「論壇」なるものに関連（レリバントな）のあるものとして、言及＝関連づけの様式の中で召喚される個物としての「人」についても、それが「論者」なり「評者」なりといった一定の役割期待につねに・すでに整序されているという本論の立場に拠れば、「三位一体」等で用いられる意味での実体（スブスタンティア）としてでではなく位格（ペルソナ）としてそれを名指すべきであろう。

[3] 本論の以下の検討対象は、原則として、『東京朝日新聞』が新聞として初めて論壇時評欄を設けた1931年11月から2000年にかけて掲載された、『朝日新聞』(1940年以前は『東京朝日新聞』に拠った)、『毎日新聞』(1943年以前は『東京日日新聞』に拠った)、『読売新聞』3紙の論壇時評欄に限られている。

[4] 見田をはじめとする時評者たちのこうした見解を受けて、『読売新聞』は「学識者が『壇』の上から、読者に『論』を説く時代は終わり、論壇は拡散し解体したかに見え」ると宣言し、「論壇時評」欄を「今月の論点」欄に改称する（読売新聞 1976: 5)。とはいえ、その後「今月の論点」が実際に採りあげたテクストも、結果としてはいわゆる総合雑誌掲載のものが多く、と同時に、それらが論壇としての実定性を欠いていることが相も変わらず言及されていくことになる。論壇の不在という語り口の根強さを物語っているともいえる。

[5] この点に関しては、鶴見俊輔による論壇時評での記述も参照（鶴見 1975)。

[6] このことは、「論壇」なる語彙が、ある時期までは、活字文化のみならず、自由民権期の演説などの口承文化の術語系により密接に結びついていた可能性も示唆している。

[7] しかもこの初出例は、象徴詩に関する文芸批評のなかで用いられたものであり、この時点での「文壇」と「論壇」との未分化を却って示すものとなっている。

[8] さらに言えば、「界・社会」といった含意においても、それがたとえば「特定の人間関係」の如き具象性から離床し、「論調」といったテクスト群の相互の関係性＝「間テクスト性」とでも呼ぶべき抽象度を獲得する上でも、「文壇」は重要な参照枠組みを提供する。後段でも登場する大宅壮一が「文壇ギルドの解体期」を『新潮』に発表し、師弟関係や人脈としての「文壇」の終焉を宣することで却ってその後のより抽象的な「文壇」論を準備することになったのが 1926 年であった。このことが象徴するように、30 年代に論壇時評なる言及様式が登場する直前においても、「論壇」の意味論的な転態に際して「文壇」概念がそれを直接的に文脈づけた可能性があるからである。

[9] たとえば「豆戦艦」で杉山平助の批評の俎上にのぼることもあった林房雄は、同欄の後身たる「槍騎兵」欄に「匿名批評撲滅論」を寄せている（林 1937）

[10] この一文が掲載された経緯については森洋介（2003: 100）を参照。

[11] 論壇時評なる様式においては一般に、自らが採り上げるテクストに言及するメタ・テクスト――すなわち他の論壇時評――までさらに言及の対象とすることには、きわめて抑制的な傾向が見られる。あたかもそれによってテクストとメタ・テクストとの境位の差を維持しようとするかのように。このテクストとメタ・テクストとの混交を回避しようとする傾向については 4 — 2 も参照。

[12] 実は、2 番目の例で「論壇時評の評者」として登場する大森義太郎自体が、2 つの言及様式の「使い分け」ないしは「侵犯」を象徴する位格となっていた。そもそも東大辞職から 1 年後の 1929 年、『文藝春秋』に連載された「当世学者気質」で激しい個人攻撃を展開した匿名子Ｘ－Ｙ－Ｚの正体とされるのが大森である（田中 1999: 191，竹内 2001: 95-107）。その後新聞紙上でも、『読売新聞』の匿名短評欄「壁評論」に（これは実名のままだが）登場し、匿名評者を痛罵したりもする。大森義太郎なる位格の下で、言葉遣いのレベルでは論壇時評的言及と短評的言及とが区別される一方で、所作のレベルでは「使い分け」を前提としつつその「侵犯」がなされることになる。

[13] もちろん、かかるテクストを産出する杉山平助は、単純な商業主義礼賛者でもない。同時期の「商品としての文学」や「批評の敗北」（氷川 1933a）といった評論では出版資本の集中や、批評家の性能の商品化といった主題を取り扱っている。

[14]「ジャーナリズム／アカデミズム」という評価軸上で、主に総合雑誌に掲載されたルポルタージュや解説記事から、時事的あるいは相当に理論的な論文までもが論壇との関連性（レリバンシー）を設定され、言及されてきた。

[15] この「読者」もまた、実体（スブスタンティア）としてよりは位格（ペルソナ）としてとらえるべき、様式の構成要素である。

[16] 30 年代から 2000 年までの『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』の論壇時評を見るかぎりでは、それぞれ、自らの論文をも紹介して自己の立場を明らかにした経済学者の土方成美の時評の例（土方 1932）や、自己の別稿に向けられた清沢洌の反論に再反論している大宅壮一の時評の例（大宅 1933）、政治学者の杉森孝次郎が担当した『東京朝日新聞』の論壇時評（杉森 1933）に関して、批判された同じ政治学者の蝋山政道が後日同紙に「杉森氏に答ふ」という反論を掲載した例（蝋山 1933）などが、数例ずつ見られる程度で、きわめて例外的といえる。

[17] 自身も「局外批評家」に数えられている科学史家の岡邦雄によれば、「『局外批評家』といふ言葉

は、おそらく大宅壮一氏が本誌［『新潮』:引用者註］の８月号に書いた『局外文芸批評家論』に始まるのではないかと思ふ」とされる（岡 1935: 14）。なおこの岡の評論と同じ雑誌には戸坂と大森もそれぞれ「局外批評家」の立場から寄稿している。

[18]「間テクスト性」なるはなはだ曖昧な語義において、「論壇」においても「文壇」においても「壇」なる語彙が指すところが完全に通底しているというわけでもない。このことは、「論壇時評」が歴史偶有的に存立しえているのに対し（「文芸時評」ならぬ）「文壇時評」なる様式は存しない、という単純な事実からもうかがえよう。

[19]「論壇」なるものの「起源」というとき、それを「知識人の言論の世界」などとして外在的・実体的に「論壇」をとらえるかぎりは、たとえば吉野作造らが『中央公論』に口述しはじめた 1910 年代なかばごろを「起源」ととらえる方がむしろ自然な解釈かもしれない。あるいは逆に「論壇」なる語彙への参照を解除し、「批評」することが一般的に備える「全体性を否定することで全体性を密輸入する」（佐藤 2002: 63）という傾向に注目するならば、その「起源」は徳富蘇峰が「批評の時代」を宣した 1888 年頃にまで遡ることになるかもしれない（木村 2002: 12）。とはいえ本論が、1930 年代を「論壇」なるものの「起源」かつ「反起源」になぞらえる含意は、上記のいずれとも微妙に異なる。それはいわば「語り口としての起源」の起源、その歴史性に照準している。

文献

林房雄，1937，「匿名批評撲滅論――槍騎兵」『東京朝日新聞』1937.3.19，朝刊 7.

土方成美，1932，「農村窮乏対策――高橋氏の専売制度論を読む」『東京朝日新聞』1932.8.8，朝刊 5.

氷川烈，1932，「『婦人公論』『婦女界』――豆戦艦 五月の雑誌」『東京朝日新聞』1932.5.4，朝刊 5.

――――，1933a，『春風を斬る』大畑書店.

――――，1933b，「改造――豆戦艦 八月の雑誌評（２）」『東京朝日新聞』1933.7.28.

今井登志喜，1935，「自由主義を繞る――十一月の論壇 1」『東京朝日新聞』1935.11.3，朝刊 9.

猪俣津南雄，1931，「ファッショ横行――論壇時評［一］」『東京朝日新聞』1931.11.8，朝刊 9.

木村直恵，2002，「＜批評＞の誕生――明治中期における＜批評＞＜改良＞＜社会＞」『比較文学』(45): 7-22.

見田宗介，1976，「『脱領域』の時代――論壇時評・下」『読売新聞』1976.5.31, 夕刊 5.

――――，1985，「大江健三郎氏の『この項続く』――論壇時評 上」『朝日新聞』1985.1.28，夕刊 7.

室伏高信，1934，「素人の登場――二月の論壇（一）」『東京朝日新聞』1934.2.4，朝刊 9.

森洋介，2002，「ジャーナリズム論の一九三〇年代――杉山平助をインデックスとして」平成一四年度日本大学国文学会総会研究発表．(http://www.geocities.co.jp/CollegeLife-Library/1959/GS/journalism02.pdf, 2007.1.3)

――――，2003，「一九三〇年代匿名批評の接線――杉山平助とジャーナリズムをめぐる試論」『語文』日本大学国文学会，(117): 97-114.

中野好夫，1977a，「目にあまる悪文・難文――思考が生煮えの人ほど 論壇時評 上」『朝日新聞』1977.1.27，夕刊 5.

――――，1977b，「過剰生産の弊害歴然――論壇時評 上」『朝日新聞』1977.5.30，夕刊 7.

岡邦雄，1935，「局外批評家の立場」『新潮』32(11): 14-18.
奥武則，2007，『論壇の戦後史―― 1945-1970』平凡社.
大森義太郎，1933a，「堺さんの名文――論壇の文章（一）」『東京朝日新聞』1933.7.23，朝刊 5.
――――，1933b，「マルキストの難文――論壇の文章（三）」『東京朝日新聞』1933.7.25，朝刊 9.
――――，1935，「矢内原氏の宗教論――論壇時評（３）」『読売新聞』1935.3.5，朝刊 4.
大塚英志，2001，「論壇誌でぼくはいかに語ったか」『戦後民主主義のリハビリテーション――論壇でぼくは何を語ったか』角川書店，7-26.
大宅壮一，1926，「文壇ギルドの解体期」『新潮』23(12).（再録：1981，『大宅壮一全集 第一巻』蒼洋社，230-241.）
――――，1933，「自由主義者の弁――清沢氏の所論を読む 八月の論壇四」『東京朝日新聞』1933.8.1，朝刊 5.
――――，1955，「『無思想人』宣言――“思想商売”ならわたしにも“手持ち”はあるが」『中央公論』70(5); 246-254.
蝋山政道，1933，「杉森氏に答ふ（上）（下）」『東京朝日新聞』1933.3.13-14，朝刊 9.
佐藤俊樹，2000，「透明な他者の後で――言説の閉域と階層の閉域と」『大航海――思想・文学・歴史』(35): 116-122.
――――，2002，「言説、権力、社会、そして言葉――象牙の塔の『バベル』」『年報社会学論集』関東社会学会，(15): 58-68.
――――，2005，『桜が創った「日本」』岩波書店.
――――，2007，「コミュニケーションそして／あるいはシステム――長岡克行氏の批判に応えて」『国際社会科学』(56): 31-72.
杉森孝次郎，1933，「自由主義の末期――蝋山氏の連盟論 三月の論壇（一）」『東京朝日新聞』1933.3.4，朝刊 9.
杉山平助，1927，「下層一断面」『三田文学』2(5): 38-54.
――――，1933，「雑誌界の諸相と支配傾向【下】」『読売新聞』1933.10.17，朝刊 4.
鈴木義男，1935，『指導的論策――八月の論壇（1）』『東京朝日新聞』1935.8.5，朝刊 9.
高橋亀吉，1932，「雑誌編集者へ――論壇月評（二）」『東京朝日新聞』1932.6.1，朝刊 5.
竹内洋，2001，『大学という病――東大紛擾と教授群像』中央公論新社.
田中紀行，1999，「論壇ジャーナリズムの成立」青木保・中村雄二郎・村上陽一郎・山折哲雄編『知識人――近代日本文化論 4』岩波書店，177-194.
戸坂潤，1934，「街頭社会学と民族社会学――七月創作評（１）」『東京日日新聞』1934,6,30．朝刊 15.
――――，1935a，「局外批評論」『新潮』32(11): 18-22.
――――，1935b，「常識・合理主義・弁証法」『セルパン』(48): 12-15.
都留重人，1962，「きびしい課題『物価』―― 論壇時評 下」『朝日新聞』1962.5.23，朝刊 9.
鶴見俊輔，1975，「日本の生命線―― 論壇時評 上」『朝日新聞』1975.10.30，夕刊 7.
潮鳴彦，1935，「政治論文に飢ゑる――論評壁」『読売新聞』1935.1.31，朝刊 10.
山口功二，1974，「マス・ジャーナリズムとしての批評（一）――杉山平助をめぐって」『評論・社会科学』同志社大学人文学会，(7): 38-59.

――――，1975，「マス・ジャーナリズムとしての批評（二）――杉山平助と昭和期ジャーナリズム」『評論・社会科学』同志社大学人文学会，(9): 65-88.
読売新聞，1976，「今月の論点」1976.6.29，夕刊 5.
吉田精一，1953，「六月号の総合雑誌」『朝日新聞』1953.5.29，朝刊 4.
横手丑之助，1932，「筆者申す――豆戦艦」『東京朝日新聞』1932.7.25，朝刊 9.

（もうり　ひろかず、東京大学大学院学際情報学府、mhirohito@mac.com）
（査読者　菊池哲彦、佐藤雅浩）

The Origin and Anti-origin of "Ronndan"

The Positional Value of 1930's Brief Magazine Reviews in Newspapers

Mouri, Hirokazu

"Rondan" in Japanese can be redefined as a kind of a social category, rather than as the substantial world of intellectuals, which has been re-actualized continuously by ex post facto mentions and connections. This paper examines the historical state of such references and associations by focusing on the two forms of magazine reviews in 1930' s newspapers, "Rondan-Jihyou" and "Zasshi-Tanpyou." Consequently, it is now made clear that our tacit understanding of impossibility of perfect definition of "Rondan" paradoxically stimulates our desires of examining of the range of its relevancy. This paper, additionally, describes how the concepts of "Rondan" and "Bundan" were correlated and, nevertheless, heterogeneous at that period.